

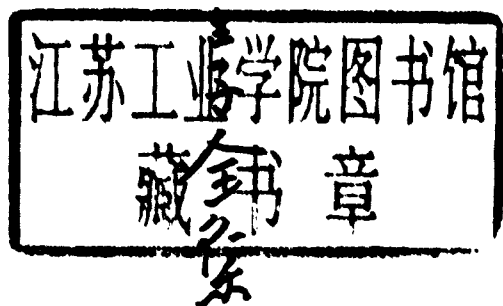
野上浩吉全集

第Ⅱ期

第六卷

日記
6

鄂上學



第Ⅱ期

第六卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第六卷

第八回配本
(全二十六卷)

一九八七年六月八日 発行

定価四二〇〇円

著 者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑 川 亨

発行所 千^{一〇}田^〇東^〇京^〇都^〇千^〇代^〇田^〇区^〇一^〇ッ^〇橋^〇一^〇五^〇五^〇
株^〇式^〇 岩^〇波^〇書^〇店^〇

電話 〇三^〇五^〇四^〇二^〇
振替 東京^〇六^〇三^〇四^〇

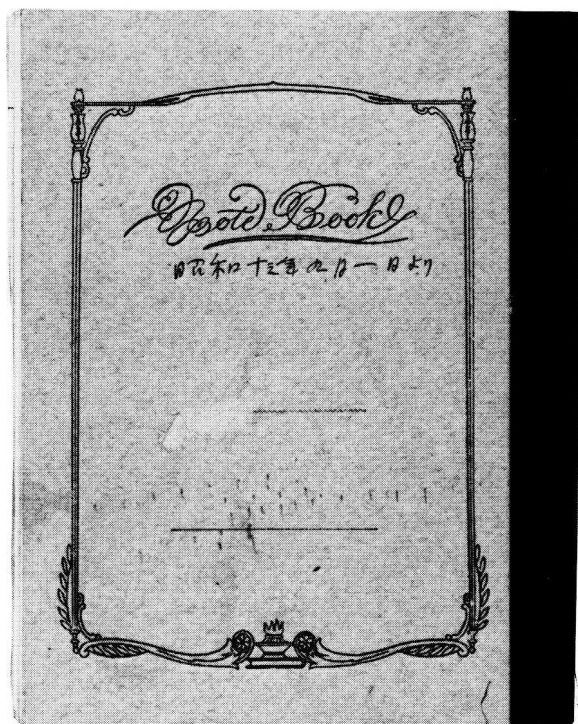
印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日
記
六

目 次

昭和十三年九月	一
昭和十四年	二七
後記	五七



昭和十三年九月一日より

仮縫の時スリッパ 大に取りかへる 五枚

コーセット

一つ

乳アテ

二つ

シミー アンダーシャツ

五枚 ソデなし

(茶デラウス がゝり) バスガウン?

長靴下ニ変ヘル 白麻ワイシャツ

ツチ氏夫人縞反物

カ衣紋掛 アイロン?

うちわと扇子

錢別

と鏡入きれ地 ⊗石本巳之吉 刺子 スカーフと金入

靴下 ×平山英子氏 スカーフと金入

手拭 細辻氏

菓子 安東保吉氏

呉茂一氏 画

×平塚

×内田

×市河

友仙ぎれ ×中鉢夫人 レース襟二つ

小物 中条さん

能画 丸岡明

全 松野奏風

菓物 トルネ

下島 扇面

帯地 ×野上皓平 指輪

×久家スルメ

ハンド・バック ×堀田夫人 コンパクト

カフスボタン 園田敬男 と横ハヤ画 □□入

ハンケチ 古谷謙 金入と子供服

ザウリ ×岩波夫人 襟留 手袋

草リタビ ×宮本夫人 手袋

フロシキ ×道家 子供服カ画

ハンドバック ×小野猛 コンパクト 襟

昭和13年9月

おもちゃ	×布川角左衛門	煙草	×河野夫人たま子	画
フロシキ	草野 レース飾り	クツ下	亀尾英四郎	
ザウリ	×大島 スカーフ三つ	ハンケチ	×荒木久子	
ハンケチ	×姉崎 ハンドバッグ	フロシキ	西尾実	
ネクタイ		銀器	×水野純	ハンドバッグ
×お金 10	桜間	おもちゃ	島崎菊枝	金入スカーフ
全 50	×桂木	式紙	太田貞一	
フロシキ	松浦 ×吉加			
画	×石井柏亭 金入とスカーフ			
ノリ	×井本夫人			
ノリ	×アベ夫人 スカーフと金入			
ハンケチ	×茅野正吉×			
全, ネクタイ	姉崎夫人, 正晃 (抹消)			
フロシキ	×森田たま			
絵	松野奏風 (抹消)			
全	丸岡明 (抹消)			
ハンケチ	平塚英吉 襟留と金入			

昭和十三年

九月一日 木 雨

八月は例により私の社交シーズンで、ろくにペンをとる気もちにもならない日が多かつた。それで私たちの生活に取つてはもつとも記憶すべき月であつた。

もうだん／＼人も少なくなつたから、なりたけ日記は怠らない事にし度いものである。

デイヴィッドを大速力でこの頃は訳してゐる。下よみをよくしておくとか甚だ能率的である。立つまへに三回ほど仕上れば上出来である。午後は久しぶりに離室で三味せん。「花の友」すっかり弾けるやうになつた。習ふより、多く練習時間を有する必要がある。

九月二日 金 小雨、きり、曇

デイヴィッド進度よし、おヒルまで頑張る。午後はまた少し三味せん。それが済んで宝生さんのおけいこに出掛けようとしてゐたら、誠一さんが来てくれた。ホールで語る。彼は私にはもつとも親愛な若い友人である。ヒットラー・ユーゲントを友人が世話してゐるとかで、その噂話をきく。今ドイツにやつてゐる日本の青少年の費用とこのお客さんとに六十万円費すとの事也。なにか惜しい気がする。日本のバタや玉子や、肉の豊富さは何より彼らを悦ばしてゐる。しかし横浜につくとから、もう歸りたがつてゐる由、規則は中々厳しく守られてゐる。団長の二十才の青年にそれ以上年の行つた仲間が、いかにも素直に服従してゐる。

丸岡の息子が軽井沢から訪ねて来て話に加はつたので、能の話もはづんだ。彼は父さんの外国の講

義を日本語〔に〕して出して貰ひ度いと云ふ依頼をもつて来たのである。

食^{マツ}食をあまり沢山たべ過ぎたので、ウタを連れて市河さんまで散歩に行く。をぢさんは例の大学もんだいの会議で上京中。父さんから一日夜の颱風のものの凄^{マツ}い有様をしらせた手紙来る。父さんにはじめてのケイケンと云ふ。山は大したあれもなかつたが、新聞を見ても東京の大さわぎがうかゞはれる。二十年ぶりの暴風雨であつたらしい。

九月三日 土 晴

午後宝生さんのおけいこに行つて帰ると、寺沢さん夫妻息子さんと訪ねて来られたと云ふ。夕食後クラブに訪ねて行くと、行き違ひにバスで来た。そのバスにはクラブの茂みのところで行き交つたのだが、メガネなしで見えなかつたのである。高橋稜夫妻も来る。離室で三味せん会。高橋さん外記猿をうたふ。可愛い、つやつぱい声。十一時まで。

九月四日 日 晴

Yとクラブに行く。十時ごろ浅間が大爆発。晴れた空に見事。一彦さんに何よりの御馳走であつた。そんなで、池の上の出つ端の土地を見に行く。上の方に新しく切り直させたのである。一彦さんが野上のをばさんところにはあんな立派な土地があるのだから、ここはうちに譲つて貰へ、とねだつてゐると云ふ。準急につゞく電車で帰京。夜から少し発熱したらしい。昨夜クラブから急いで上つて来て汗びつしよりになり、その後離室で冷えたらしい。

九月五日 月 雨

また雨。らく寐をする。平塚さんアヤちゃんをつれて来る。枕もとで寐そべりながら話す。

九月六日 火 晴

午前市河さんへ行く。大学の会がまた明日開かれるので、急に栄ちゃんだけを残し帰京との事。外国へもつて行くものゝ追加を晴子さんと相談して書く。もし忙しければ迎ひに来なくともよい、と云ふデンワを父さんにかける事をたのむ。栄ちゃんは午後入れ違ひに来る相良さんを待ち、耀三と明後日神津牧場へ行くのである。

夜磯野夫人と誠一さん。

大島さん夫妻

九月七日 水 晴

ちつとしてゐてもころが愉しくなごむ程の美しい晴れがつづく。

午後宝生さんにおけいこ。最後である。教つたところを浚つた後なにかは始めるかとの事故、もう一二日で帰るので辞退するとそれでは私が一番うたつて見せるから、ノリ合ひのところをよくそれで見ると云ひ、通盛をはじめから一番うたつてくれた。実に渋い、それで変化と抑揚にとんだいかにも見事なものであつたので独りできくのが勿体なかつた。この夏のお礼として十円おいて来る。今日の一番でも何百円を支払ふ値打があるのにとおもふ。五六度も通つて、十円札の一枚でもいやなかほをしないところが新氏のよいところであらうが。茶台ずしで、平塚さん綾ちゃん、相良さん栄ちゃんを夜およびする。月があまりに美しいので、みんなして見晴らしから池の方まで歩

りく。それからまた湯沢に下り、磯野夫人と誠一さんとで月を見ながら家まで帰り、十二時までホールで語る。

九月八日 木 午後晴

朝 Y 相良さん栄ちゃんと神津牧場へ出立。午後父さん来る。

川上さん帰京。

九月九日 金 晴

午後池の上の土地に杭を打ちに行く。平塚さん、あやちゃん。事務所の黒岩。途中平塚さんが南さんに明朝帰京の挨拶によつたので私もちよつと行く。それから竹上さんへ廻るまへに父さんと私はアベさんとこまで。先日竹上さん井本さん同道で父さんに対する組合の感謝状をもつて来てくれたのでそのアイサツをかねてゐる。竹上さんは留守。丁度散歩に行つてゐた奥さんが帰つて来た。

秋風颯々として、日光がびいんとさえながら美しく云ひようもないほど気もちよし、竹上さんへ行く途中平塚さんが綾ちゃんのために取つたと云ふ土地を見る。小流れがある。それを庭に取り入れて、湯どのに引いて、どこに取つて、と云ふ彼女の遠いおもんばかりは、みなこの八つの小さい孫娘をめぐつて建てられてゐる。途中またヒヨドリ越えの上の飯塚さんの土地を見る。つい二三日まへ飯塚部隊長として戦死した人の持ち地所。彼が法政の教官をしてゐたカンケイのものである。戦死したのもう要るまいと云ふわけである。少々ロコツ過ぎたこれは考へ方である。へと／＼に疲れて帰る。父さんはひどくお腹をすかして不きげんになつてゐる。平塚さんは私には実に優しい友

人で、また善良な人ながら、この人たちと接する時芸術は遠く雲外三十里に飛び去る。多くの女たちがかうして何千年も生きて来たのであらうか。

美土路昌一氏と服部氏に手紙を出す。北野氏の言葉による也

九月十日 土 曇 微陽 月美し

朝さら／＼小雨のおとがしたとおもつたら、浅間の砂が降つたのであつた。

父さんウタ八時すぎの電車で帰京。私はYが今日牧場から帰る事になるので、それを待つて明日帰京の予定。

父さんたちの立つた後もの凄い爆発があつた。鳴動が十数分もつゞいた。しかし曇つてゐて噴煙はよく見えず。

この山荘に今かうしてたつた一人残ると、イギリスへさへあまり行き度くない位私には快適にころ愉しいのである。八月いつばい人事カンケイにはもうこの頃は覚悟が出来て、まへほど苦しくもなく、またいら／＼もしない。(二つは創作を断念してゐるせもある)いろ／＼な人のいろ／＼な生活や、性格や、型を見るのがちよつと面白くさへかんずる。これが所謂人の世の姿であるから。しかしそれもせいぜい小一月で沢山である。なにか生温く、くさりかけた水にゐた魚が、清水を注がれたやうなさわやかさと活き／＼した復活をかんずる。キノコ爺初たけをどつさり持ちこむ。明日持つて帰らう。少し寺沢さんへおくる。あすこにもここにもと思へど、丁度デイヴィッドの原稿二月分をセイリ中でその気になれなかつた。今日いつばいには耀三が帰る筈であつたので、風呂ま

で湧かして待つたがとうと帰宅せず。その風呂でかみを洗つた。

九月十一日 日 晴

一番の電車で燿三帰宅。昨夜終列車に間に合はず駅まへに泊まつたとの事也。父さんが持つて来て、彼にとつてあつた洋菓子早速たべる。私だけでも帰らず待つてゐてよかつた。一時四十五分の電車で、二三日ひとり残ると云ふ彼を置いて帰京の途につく。しかし彼は駅まで送つてくれる。来春の入学試験さへ出来てくれたら、もうこれ以上に慾の出しやうはない。玉の如き麗日なり。栗平と二度あげの間は、おそろしきばか(り)の降灰で、見るかぎりの樹木や草原が鼠いろに汚れてゐる。こんなさかなな砂に蔽はれた光景を見るのははじめてである。

軽井沢からのくるまでいろ／＼おもしろい風景を見た。桃いろの洋装夫人。英語がうまい。子供は女中と三等。大きな西洋人の男。白の毛糸のチャン／＼子を着てゐる。洋装夫人としきりに交際する。その異人のかみさんらしい日本女。つれの若い二人の娘。女給らしい。お金頂戴。I have no, any one. デンボウを打たなかつたので誰も来てゐなかつた。ガソリンの儉約でクルマが中と手に入らなかつたが、丁度方面に帰るシヨファアを見つけて帰宅。おみやは松だけ。モキには例の匂ひのよいぜんまい羊歯。芳香家ぢゆうに充つ

九月十二日 月 晴

午前横浜の洋服や来る。船中の夏着の洋服、をたのむ。あとは裏返しその他。合着も一着拵へる事にする。午後から松屋に買物に行く。山下をらず。若い宮本とか云ふ男が非常にマメに世話をして

くれる。三分の一ほどは整った。もうあと二日位ですむだらう。疲れて帰宅。

山からもつて来た初茸御飯。これも山からの鯉の丸あげで父さんとモキと三人で食事。Yはひとり木村で食事ならん。父さん昼は一日会の午餐会。岡本さんがタイムスに出てゐた日本の捕虜の話をした由、七百人ほど。将校が多い。外人記者が写真をとつてゐるので、顔を背けたり、手で顔をかくしたりしてゐる由。多分捕虜もゐる事とは考へてゐたが、事実としてははじめて聞く。

中興公司の十河氏がやめるらしい。今の軍部とはとてもいつしよにやつて行けないのらしい。今夜より燈火管制。

暗い門口に家々の人が出て、夕涼みをたのしみつゝ防空／＼としやべつてゐる。これも九月の一つのお祭になつたと云ふ有様である。

九月十三日 火 晴

今日は平塚さんを誘つて行く。帰りに牛込の岡田さんによる。女大で話をする約束をきめる。二十一日。平林たい子さんの病氣治療費の件。夜Y帰宅。そこへ春恵さんも遊びに来たので、おすしを取る。三味せんを弾いて見せ、彼女にも弾かせる。やつぱり一番素早く覚えた。

九月十四日 水 晴

午前茅野ひろ子さん。午後みのべ民子さん。

亮吉さんは相変らず悠々としてゐる由、同じく愛宕署。大さうぢでガラス拭きの手伝をした。今度の署長はミノベ先生の最後の講義をきいた人。先生が出掛けて理屈責めにやられるのが一番困るら

しい。亮吉さんはよく屋上で運動をさせられたが、この頃は時と土をふましてくる。この間はソバやの小僧と競走して負けた云々。おもての通りも歩かしてくれた由、その位ならうちに帰したつてよいものをとたみ子さんフンガイする。軽井沢から一人のロシア人が引張られて来てゐる。彼のたべてゐるビフテキがおいしさうだと云ふので、その店にたのんだ、一円。

しかしこんな事の出来る亮吉氏は、ブタ箱の中でも特権階級である。今はなんにもことがないので、大森氏に生活費をあげてゐたのを、大森氏が辞した後、それを労農党にまはしたと云ふ事に拵へあげようとしてゐるらしい。

九月十六日

夜市河さんから帰つて見ると靖国丸が急に出帆をくりあげ、二十七日横浜を出ると云つて来てゐたので大あはてになる（あとで分つた事だが、まへの船が急に御用船になつた為）

九月十七日 土 晴

朝内田邸に行く。いろいろな洋服をきて見る。ギリシアやエジプト行きには洋服が必要と云はれた為め。灰いろと茶が似合ふ。洋服やの来るのを待つたがとうと来らず。

九月十八日 日 晴

朝からアタマの手入れ。その間に島崎さん、和子さん。夜子供らと銀座に出て会食

九月十九日 月 晴

姉崎夫人を訪ひ、それから内田邸で晴子さんとおちあふ。洋服や来る。灰いろのスーツを注文する。